

西尾末廣著

私の政治手帖

風雪六年の日本を顧る



70-

## まえがき

私は昨年の秋、自傳『大衆と共に』を出版した。それは終戦直後までの私の半生の記録であるが、その続篇として、戦後における私の眞実の生活記録を綴つたものがこの冊子である。従つて、これはまた戦後政界の打明話でもある。この内容は、本年一月と五月の前後二回、求められるまま大阪新聞に「風雪六年」と題して連載したものを、さらに補正加筆して一本に纏めたものである。

私は二十三年十月、昭電事件で検挙され小菅の拘留所にいる間に、かつて読んだ『ヒンデンブルグの悲劇』（ホキトラ・ベネット著）という本を差入れて貰つて再読した。これは第一次大戦後の崩壊から再建へのドイツの苦悩を書いたものであるが、中で殊に私の興味をひいたのはそこに見られる政治家の深い苦悩についてであつた。国民は戦勝者連合国の圧迫に対して強い反抗心を持つてゐる。しかも敗戦に打ちのめされたドイツはこれに抵抗する力を持たず、戦勝国の制圧と国民の反撥との間に挟つて政治家は非常に苦しんでいる。その間にあつて大統領ヒンデンブルグはドイツ再建の英雄として、偶像化されてはいるが、しばしば意識的に或は無意識的に自分を支持する政治家を裏切つては、その時々々の勢力の上のつかつて大統領としての地位を保つてゆくのである。

眞にドイツを再建しようとするストレーゼマン、ブリューニングらの實際政治家は、幾たびかヒンデンブルグに裏切られた。また彼らは政敵の策謀によつて陥穽に陥れたこともしばしばである。こうした政治家の宿命、ことに敗戦国の政治家の宿命に私は非常な同情を持つと共に、自分らの悲運と合せ考へて感慨一入深いものがあつた。およそ敗戦国で責任の地位に立つ政治家というほどのものは、総て悲劇的宿命を背負つていゝるのではなからうかとさへ思つた。国民は政治家の苦闘に対する理解と同情なく、ただこれを非難するばかりであり、政治家はお互に傷つけあい陥れあう。そうした政治的悲劇の数年にわたる史実がこの書には忠実に描かれていて、結局カイザーの忠実なる軍人ヒンデンブルグは、自己の責任においてカイザーを国外に放逐し、ヒトラーに首相の印綬を授ける羽目に追いこまれてしまう。そしてヒトラーによつて第二次世界大戦が引起され、やがて再び敗戦の歴史に直面して行つたドイツの悲劇廻転の跡は、日本にとつても決して他山の石ではない。さいはいこの小冊子が、左様な意味に於て敗戦日本の政治家の苦惱の一斑をでも読者に理解されるよすがとなるならば私の望外の喜びである。

昭和二十七年七月

西 尾 末 廣

## 目 次

まえがき	1
日本社会党の創立をめぐるつて	1
厄介だつた「天皇制」と「左派」の取扱ひ	1
批判的であるよりまづ建設的であれ	4
日共の共闘申入れを一蹴す	5
私は何故民主人民連盟を駁撃したか	8
幣原から吉田へ	11
閣内野党の主張敗る	11
三木武吉と徳田球一	14
吉田内閣との連立問題	18
吉田首相から四たび久閣交渉	18
連立工作を打切つたとき	22

眞にドイツを再建しようとするストレーゼマン、ブリュニングらの實際政治家は、幾たびかヒ

再び連立運動表面化す ..... 24

第三次工作もワンマンが禍 ..... 27

初めて社会党首班内閣の出現 ..... 31

意外にも社会党が第一党 ..... 31

胸迫る「片山総理大臣」議決の瞬間 ..... 34

閣員名簿が出来上るまで ..... 38

組閣費用わづかに六万円 ..... 41

貧乏世帯やりくりの苦労話 ..... 43

平野事件の真相 ..... 46

ケージスから農相罷免の勧告 ..... 46

唯一の失策は記者団への不用意な一言 ..... 50

平野問題はGHQの勢力轉移と関係があつた ..... 53

党内左派の倒閣運動 ..... 56

炭管案で内外から挾撃さる ..... 56

労組代表賃上げで食い下がる ..... 60

農相後任問題で野党攻勢に拍車 ..... 63

閣内不統一から八カ月にして内閣総辞職 ..... 65

芦田連立内閣の内情 ..... 67

党議に服して再び入閣 ..... 67

閣内における私の役割 ..... 71

ドクター・フラインと賃金釘付問答 ..... 73

相次ぐ受難 ..... 76

「書記長である西尾末広個人」 ..... 76

政争に巻き込まれた検察庁 ..... 79

昭電事件はどこにポイントがあつたか ..... 83

わが生涯の最悪の年 ..... 87

眞にドイツを再建しようとするストレーゼマン、ブリューニングらの實際政治家は、幾たびかヒ

## 日本社会黨の創立をめぐるつて

### 厄介だった「天皇制」と「左派」の取扱い

終戦になつて三日目の八月十七日、私はリュツクサクク一つ背負つて東京に向つた。社会主義政  
黨の創立と労働組合、農民組合再建のためスタートを切つたのである。

大阪で重大放送を涙と共に聴いた十五日には、京都に行つて水谷長三郎君と連絡をとり、東京に  
着くと、その足でまず松岡駒吉君を大井の宅に訪ねた。「僕は社会主義政黨を創立するから、君は  
労働組合の再建を早速やつて貰いたい」という私の短兵急な提議には松岡君も面食つていた。

戦後の日本再建は、勤労階級の協力なしにはできない。むしろ勤労階級はその主導力にならなけ  
ればならない。そのためには党と組合の再組織が先決である。かつて労働運動をやり、社会運動を  
やつたものが去就に迷つて虚脱状態にあるこの時、全国の同志に方向を与えて奮起させねばならぬ  
というのが私の固い信念であつた。

眞にドイツを再建しようとするストレーゼマン、ブリュニングらの實際政治家は、幾たびかヒ

その後、党の創立については、水谷、平野、私の三人が各方面と連絡をとりながら、新橋の藏前工業会館に事務所を置いて準備を進めた。これが進展して日比谷公会堂で日本社会党の結党大会を挙げたのは十一月二日であつた。

結党過程において問題になつたことの一つは、天皇制の賛否についてであつた。その準備会において、天皇制は廃止すべしとする意見は相当にあつた。これに対して私は、天皇制存続を最も強く主張した一人である。私は現に詔勅によつて混乱なしに終戦のできたことを胸にしみて感じていた。私はかねてこの戦争は米軍が日本国土に上陸して来て、日本の軍隊が壊滅した後でなければ結末がつかぬかも知れぬ。この場合、国内は非常に混乱して、時には同胞相争うような事態が起るかも知れぬ。敗戦の上にそのようなことになつては日本の再建は非常に困難であると憂慮していた。それが陛下の詔勅により終戦になつた。敗戦形式としては最善のものである。従つて日本の再建は比較的容易であると心に勇躍するものを感じたのである。重大放逐に涙したのは半分は悲しみの涙、その半分はこの歡びの涙であつた。

しかもまた、日本は敗戦の結果精神的支柱を失つてゐる。政治的にも従来の支柱であつた天皇制を廃止したのでは、日本の再建に甚だ不都合がある。もちろん現存の天皇制をそのまま支持することはできないが、この混乱期における天皇存在の重要な意義については、私は確信を持つてこれを認めていたのである。私のかかる現実主義は、だからといつてお座なりのその場／＼の御都合主義では決してないのである。常に一貫した主義方針に基いて、現実を直視しながら改革を行わんとする行き方である。

もう一つの問題は、加藤勘十、鈴木茂三郎君らの日本無産党系の左派を入れるかどうかという点である。片山哲氏を中心とする旧社民系の有志は、議員よりも院外勢力を糾合して、イデオロギ―を同じうするものをもつて政党を結成しようとする動きもあつた。このグループは旧日無系の人々を加えることについては相当強い反対があつたが、私と水谷、平野の三人の間では、この際としては、共産党を除く古い各無産党系のもが一つになつて、単一社会主義政党を結成するのだけは強力なものにはならない。という方針を決めておつた。

そこで、私が旧社民系の人たちを説得して、結局これに同調せしめることになつた。この間に処して、旧日労系は党の創立についていちばん消極的であつたが、この人たちとも院内で折衝し、ここに単一社会主義政党の創立となつたのである。

日本社会党が分裂した今日、われわれのこの時の考え方を間違つていたようにいう人もあるが、私はそうは思わない。あの際、たとい左右別々に出発したとしても、恐らく社会主義政党の統一運動が起つたであらう。またいかなる形をとつたにしても、そうスムーズに發達したとも思われぬ。

眞にドイツを再建しようとするストレゼマン、ブリューニングらの實際政治家は、幾たびかヒ

要するに私のものの考えの基礎になつてゐることは、民主主義は経験主義だということである。大衆に正確な判断力ができて、それが基礎になつてすべてのものが運営されて行く、民主主義にとつて何より大事な事は大衆が経験を通じて成長して行くことである。

今回の社会党の分裂もこの意味において決して無駄ではなかつた。そして分裂の経験を通じてまたやがて統一の要求が起つてくることも必至である。ただしその時には大衆はこの経験を通じて成長してゐる。現在の左右の思想的対立と見解の相違をそのままにしての妥協でなく、統一もまた成長した形において行われねばならない。またその時がやがて来る。民主社会主義の正常な姿によつて統一される時がかならず来る。だが今はその時ではない。

### 批判的であるよりも、建設的であれ

労働組合の再建については、松岡駒吉君の名をもつて元の労働運動者に招請状を發し、二十年十月十日、新橋の藏前工業会館で労働組合再建懇談会が開かれた。京浜地方、京阪神地方を中心に全国から約百名の關係者が集まつた。その時、私は議長になつて協議を進めたが、出席者の意見發表があつた後、私は潮時を見てかねて用意してゐた労働組合創立方針書を提出して、その審議を求めた。

その趣旨は「焼野が原から立ち上る戦後の労働組合運動は如何なるものであるべきか。それはもはや戦前の如き、批判的、反逆的、あるいは破壊的なものであつてはならぬ。日本の産業の復興も、新日本の建設も、われわれ労働者の双肩にかかつてゐるとの、高い矜持と、深い責任感に目覚めて、あくまで建設的態度をもつて高効率生産に邁進しなければならぬ。この方針の下に全国の労働者を一つの組織の下に結集せしめなければならない」という意味のものであつた。要するに、戦前と戦後の客観的諸条件の変化に伴つて、主観的にも頭の切替えをせねばならぬというのが私の主張であつた。

これに対しては何らの異議もなく、満場一致でこの方針を決定した。しかし左派と目される人々は産報、翼賛会關係者を、一切組合から排除すべきであると強く主張した。これは一つには旧日労系に対するいやがらせであり、一つには自派勢力の拡大を狙う派閥対立が、すでにここに現われていたことでもる。

ともあれ、私がこの時主張した労働組合に対する態度は、同時にまた私の党に対する態度でもあつた。私の戦後の行動の基準もここにあつたのである。

### 日共の共闘申入れを一蹴す

注いで盛り立てた日本労働組合総同盟からも除名された。土建献金事件は当時まだ第二審の控訴中だつた。昭電事件にもひつかかつている。そして選挙も落選した。つまり重要な不祥事が五つも重なつて覆ひかかつてきたのである。このような凶事不幸に出合つた人はあまり多くあるまい。

けれども私は、精神的には少しも挫けなかつた。それは結局自分の良心に恥することがなかつたからである。私はよく信念居士だと云われるが、結局、信念とは良心の別名でもあると思う。現に私はこれあるがためにこの難局に耐えてきたのだ。

そして私は、この難局を無駄にはしなかつた積りだ。年六十にして始めて心の窓が開かれたように人生行路上の敬示をつかみ得たことも少くない。またその身山中にあれば蘆山の全容を見ず、という諺があるが、私は距離を置いて社会党並に政界を見る機会を得たために、従来ともすれば陥りがちだつたマンネリズムからの脱皮に気づいたこともある。自由な立場で広く各界の人々の話をきく機会も得て心の窓を開くことが出来た。

実にこの三年半の歳月は私には尊い修練の時であつた。天の試練の時ともいえるであろう。風雪にさらされたこの数年間を長い一生から見れば必ずしもマイナスであるとは考えない。